
アルカディア・サーガ

秋月 スルメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカディア・サーガ

【Nコード】

N1315T

【作者名】

秋月 スルメ

【あらすじ】

世界中でもっとも人気のあるVRMMO、アルカディア。そのオンラインゲームにおいてレベルをカンストさせた少年はその数日後、異世界に逝ってしまった。

これはVRMMOのトッププレイヤーの少年が異世界で起こすハーレム系ファンタジーです！

プロローグ

焼け付いた雲が空を占める。世界は紅く、鉄臭い。まるで血で満ちているように。広がる荒涼とした大地は余地なく屍に覆われ、幾万もの亡者たちが生者を呪う。時おりリンが燃える青みがかつた炎が彼らの身体を焼いては、その叫びはいっそう憎悪にあふれるものとなった。

少年はその光景をどこかから見ていた。それはさながら神の視点のようで、どこを見てもピントがぼやけたりすることはない。少年の視界いっぱいには生々しく鮮明な惨劇の風景が繰り広げられた。

「なんだよこれ……。何なんだよ！」

本能的な恐怖と不安に掻き乱される少年の頭脳。彼はわけもわからずに叫び、もがく。理性はふわふわと飛んでいってしまったように、その姿はさながら獣だ。

唐突に、少年の意識が遠のいた。快い眠気が彼を襲う。彼はたちまちのうちに睡魔に降伏して、身体の動きを止めた。すると一瞬で、彼の意識は白い眠りの世界へと旅立ったのだった。

「はあ……。あれは一体何だったんだろ？」

少年が目覚めてみると、そこは見慣れた部屋だった。くすんだ木

目調の天井に、鉛色になった板敷きの床。すべて見覚えがある。ここは確かに、少年がアルカディアで所有する『部屋』だった。

VRMMORPGアルカディア。この国産オンラインゲームは現在日本だけでなく、世界中で人気のゲームだ。そのプレイヤー人口たるや数億人。特に日本の若者社会では、やってない方が少数派だという話まである。

少年もまたその多数派の一人だった。むしろ、少年のプレイヤーネームであるカイルはアルカディアの中でも有名なほどだ。数少ない魔法職のカンストキャラとして。

アルカディアはキャラの成長にレベル制とスキル制を採用していた。レベルアップをする则能力値が上がり、ポイントがもらえる。そのポイントを所持しているスキルに割り振ることで技能を手に入れるというシステムだ。

加えて、職業という概念がアルカディアにはあった。基本職が八種類、上級職が十六種類、最上級職が三十二種類の合計五十六種類だ。これらはいずれもキャラの能力値や所持できるスキルに関わっていて、職によって成長速度も異なっている。

その中でも基本職魔法使いから派生していく魔法職は成長が極端に遅かった。しかも、その能力値はソロプレイなどほぼ無理というもの。攻略サイトに『廃人仕様』とか載せられるほどだった。

カイルは極端な廃人という訳ではない。その彼がレベルを上限の五百に到達させることができたのはいくつかの事柄に恵まれていたからであった。

まず一つはもつとも死亡しやすい序盤に偶然、レア防具を手に入れることができたこと。そして二つ目はいつでもパーティーを組めるヘビープレイヤーの友人ができたこと。これらの理由で彼はつい先日、カンストを成し遂げたのだ。

「仕方ない、GMに連絡だけして出掛けるかな」

カイルはさきほどの光景にショックを受けたのか少し疲れたような顔を見ると、ウィンドウを開こうとした。指を突き出してオープン、とキーワードを告げる。

だが現れるはずのウィンドウは出なかった。反応が悪いのかと思いいカイルはもう一度、さきほどよりも一回り大きな声でキーワードを言う。しかしそれでもウィンドウが出ることはなかった。

「ウィンドウまで壊れてるのか……。これじゃフレンドも呼べないし……。面倒だけど役所に行くしかないなあ」

カイルは眉を寄せると、役所の場所を思ってたため息をついた。GMの常駐している役所は、彼の部屋と市街地を挟んでちょうど街の反対側に存在する。その距離を移動する手間を考えると、なかなかには彼は気が重かった。

しかし、いけないわけにもいかなかった。あまりにも薄気味悪いことであつたし、嫌な予感がしたのだ。彼はどことなく重い足取りで部屋の端に向かうと、荷物を出すためアイテムボックスに手をかけた。

「はあ……。ぬいぐるみ!？」

カイルは思わず素っ頓狂な叫びを上げて、後ろに尻餅をついてしまった。アイテムボックスには何故か、ぬいぐるみがぎっしりと収納されていた。きちんと並べられて、それぞれにリボンまで付けられている。赤、青、黄色と色鮮やかでなんとも少女趣味だ。

慌ててカイルはアイテムボックスを閉じると、その外観をチエックした。良く見てみると角張っていたはずの箱が角がとれて丸つこくなっている。さらに鍵の部分の形状もより古めかしいものへと変化していた。

「おかしいな？　どうなってるんだ？」

「おい、お前！　人の部屋で何をやっている！」

鋭く響きわたる鋼のような高い声。驚いたカイルが後ろに振り向くと、仁王立ちをした若い女がいた。燃え立つような赤髪をそばだたせて、顔を真っ赤に染め上げながら……。

第一話 ゲームの世界(?)

カイルは一瞬、石化したように女を見た。その時彼は、ポカンと目を見開き完全にあきれ顔になっていた。

「マイルームには他人は入れないはずだ。しかも「人の部屋」だと? まったく不思議な話だなあ。

カイルはいささか不機嫌になった。彼は濃いめの眉をへの字に曲げると、女に皮肉めいた視線を投げる。

「人の部屋も何も、ここは僕のマイルームだ。おかしいことは言わないでくれ」

「おかしいのはそっちだろ! 私の部屋に勝手に侵入しておいて、あまつさえ自分の部屋だとは。ずうずうしいにもほどがある! : : : しかも、私の秘密コレクションまで見たようだしな……。まったく許せん! 覚悟しろ!」

女はいきなりカイルに向かって手を伸ばしてきた。カイルはそれを横に跳んで回避する。手は宙を切つて、女は顔を歪める。そのあと女は次々と手を出してくるが、カイルにかすりもなかった。

「いきなりはないだろ! 僕の話も聞いてくれよ!」

「ちつ、素早い奴だな!」

「無視か!」

女は手を広げるとカイルに向かって飛び込む。鎧で着膨れた身体が、一気にカイルとの距離を詰めた。重厚な全身鎧で身を固めているにも関わらず、信じられない速さだ。

カイルは足に力を入れ、一気に跳び上がった。彼の小柄な身体は軽やかに浮かび上がり、天井を髪がこする。女はそれを見上げて驚いた顔をしたが、鎧で重くなった身体は止まらなかった。

「ぐはっ！ おのれえ！」

壁に身体を打ち付けて、聞き苦しい呻きを上げる女。その目はいっそう怒りで燃え上がり、なにかのオーラまでも感じられそうなのだ。そのただならぬ気配に、カイルは素早く呪文を紡ぐ。

「我が身に満ちる魔力よ、敵を戒めよ！ バインド！」

「なにっ、書もなしに魔法だと！」

驚愕に顔を歪めた女は、一瞬で魔力の網に搦め捕られた。彼女は必死にもがくものの、頑強な光の網はよりきつく彼女を縛り上げるばかり。緩むことすらなかった。

バインドは詠唱こそ短い、消費MPの多い高威力呪文だ。その威力は魔法職を極めたカイルが使用すると、上級ダンジョンのボスモンスターを数十秒も拘束できるほどである。女がカンストプレイヤーだとしてもしばらくは持つはずだった。

カイルは動けなくなった女にゆっくりと近づいていく。彼は女の蒼く透けるような瞳をよくよく見つめた。そしてふつとやつれたような息をついた。

「ねえ、どうして君は僕の部屋に侵入したのさ」

「だ・か・ら私の部屋なのだ！ それと君はやめろ。私はメリナ、だからメリナさんと呼べ！」

「ふう、わかったよ。だったらメリナさん、どうやってこの部屋に入ったの？」

「わかってないではないか！ …… もう一回家の外から確かめてみると良い。私の名前が書かれた表札があるからな、さすがにそれを見たら自分の部屋だとは言えないだろう」

「しょうがないなあ……」

カイルの返事は実に気のないものだった。彼はそのまま、かなり面倒臭そうに部屋のドアへと歩いていく。メリナはそれを半ば血走ったような目で睨んでいた。

アルカディアにおいて、指定した場所と違う場所にログインしたという事故をカイルは聞いたことがなかった。彼の百人単位でいるフレンドからだけでなく、そういったバグをネタにしているような攻略サイトや掲示板でもある。百パーセントないと言い切れないが、事故が起きるのは宝くじ並に低い可能性と言えた。

だからだろう、カイルはぞんざいにドアを開けて外に出た。しかしこの瞬間、彼は雷が降ってきたような衝撃を受けた。

「えっ……！？」

彼の目に、栄えた街の様子が飛び込む。人であふれた広い石畳の通り。軒を連ねる無数の露店。人々が無数に通り過ぎていき、商人が威勢良く叫んでいる。建物はどれも趣のある煉瓦づくりで、時代の先端の香りがした。

彼のいた部屋はその通りに面した建物の二階部分にあつた。一階部分はなにかの店になっていて、そこから彼の今いる外に張り出したスペースへと階段が伸びている。これはありえないことだった。

カイルが持っているマイルームは裏通りに面した建物の一階にあるはずだった。間違つてもこんな賑やかな場所にはない。ゲームの中でも表通り沿いは物件が高いため、買うときにまだレベルの低かったカイルは裏通りの物件を買ったのだ。自分でじっくりと部屋を選んだため、そのことは鮮明に覚えている。

目の前の光景を拒否するように、カイルはドアをピシヤリと閉めた。彼はそのまま、張り付いたような無表情でメリナに向かっていく。その焦ったような様子を見たメリナは得意げな顔をした。俗に言うドヤ顔というやつだ。

「やっぱり私の部屋だったろう？ わかったら早くこの魔法を解除して帰ってくれ」

「……ここはどこなんだ？」

「ふえ？」

「ここはどこなんだって聞いているんだ！」

有無を言わせぬ迫力があつた。目には静かに燃える炎が見える。圧倒的な鬼のような迫力にメリナは押されてしまい、どもりながら現住所をカイルに教えた。

「ええつと、シフィアの南三番通りだ」

「シフィアってどこにあるんだ？ できれば大陸の名前から教えて欲しい」

「変なことを聞くやつだな。ロランシア大陸のラース王国に決まってるだろう」

カイルは頭を抱えた。彼の胸の中に、「異世界召喚」という単語が無数に襲来する。だがここで彼は最後の希望を込めてメリナに質問した。

「メリナさん、ガルシア大陸とかって聞いたことないか？」

「ガルシア……待ってくれ。どこかで聞いたぞ」

メリナは不自由な身体を器用に捻って考え始める。カイルの胸にわずかに希望が盛り返してきた。彼はメリナが思い出すのを今か今かと待った。すると――

「……思い出したぞ！ ギルドでミースから聞いたんだった。確か旧文明時代にはこの大陸がガルシアと呼ばれてたって言うてたぞ」

……カイルの中で神が死んだ。

第一話 ゲームの世界(?) (後書き)

第二話 たぶん信用されたい

カイルの頭はからっぽになった。考える力を失ってしまったようで、真っ白になって何も出てこない。だがとりあえず、カイルはメリナに部屋にいた事情を説明することにした。むろん本当のことは言わない。口から出まかせの嘘っぱちである。

意外なことに、嘘はすらすらと出てきた。人間、追い詰められるとなんでもできるものであるらしい。たどたどしくはあったが、カイルはもっともらしい嘘をメリナの前に並び立てることに成功した――

「……となるとこういうことか？ お前は辺境に住んでいる魔法使いで、自分の部屋に魔法で帰ったつもりがなにかの事故で私の部屋についた。それでたまたま、私の部屋がお前の部屋に良く似ていたから勘違いをしてしまったと……」

「そういうことだね」

「だが、それだとかかしくないか？ それだとお前は書もなしに転移魔法なんて高度な魔法が使えることになるが」

「……ええつとあの、書ってなんですか？」

カイルは心底困った顔をした。アルカディアには「書」と呼ばれるようなアイテムはない。この世界特有なものようだった。そうするとカイルはおとなしく白旗を上げて、メリナから話を聞くしかないのだ。下手に知ったかぶりをするとろくなことに合わないことぐらい、カイルは知っている。

メリナは原始人でも見るような顔をした。田舎者ではなく、原始人である。そのあまりの顔にカイルはいろいろと思ったが、開きそうになる口を堪えてぐっとうぐんだ。

「どれだけ田舎に住んでいたんだ？ 山奥の仙人だって知ってるよ。うなことだぞ。いいか、書というのは……。ああ、今から説明するからこの網をなんとかしてくれ。話しにくくてたまらん」

「ああ、ごめん忘れてた！ ……魔力よ、その源たる世界へ還れ！
ディスプレイ！」

「おっとつと！」

魔力の網は淡く光る粒となって宙に消えていった。急につつかえのとれた格好となったメリナは、その場でよたついてしまう。その少し間の抜けた様子にカイルは口元を歪め、ぷすつと小さく息を漏らす。

「こら、笑うな！」

「ごめんごめん、笑わないよ」

「……まあ、今のは特別によしとしてやろう。私は心の広い大人なんだからな。それより書についてだったか。これはみんな書と呼ぶが、正式には魔導書というものだ。人間が高度な魔法を使うのを補助してくれるアイテムだよ。旧文明からの遺物で、これがないと人間はほとんど魔法を使えないはずなのだが……」

メリナは疑わしげな視線をカイルにぶつけた。カイルはとっさに

何か良い考えはないかと頭を回す。だが、さきほどとは違って妙案は浮かばない。カイルの限界を越えてしまっていたようだ。

「うつ……ぼつ、僕はすごく遠い所から来たんだ。この大陸の外にある場所からね。そこでは書がなくても魔法が使えたんだよ。だから僕は人間だけど書なしでも魔法が使える……」

- - だめだ、いくらなんでも苦し過ぎる……！ カイルは嘘がばれるのを覚悟した。薄く口を開けて、いつでも呪文を唱えられるように備える。ばれたらすぐにメリナを拘束して、ここから逃げ出すつもりだった。

しかし、メリナはカイルの考えたような反応はしなかった。彼女は考え込むような顔をしてゆっくり部屋の奥へと移動していく。そしてそこにあつた椅子に深く腰掛けると、まっすぐにカイルの瞳を見つめた。

何かを試されているようだ、とカイルは感じた。彼はとっさにメリナの蒼い瞳に向かって視線を返す。二人はにわかに見つめ合つて、カイルの中で緊張感が高まっていた。

その見つめ合いは何十秒か続いて、部屋の中の空気が引き締まっていた。カイルはメリナの見透かすような瞳に汗をかきつつも、負けじと彼女の瞳を見続ける。すると不意に、メリナが口を開いた。

「……悪い者ではなさそうだ。嘘っぱいが信じてみることにしよう。現に魔法も使えていたしな」

「信じてくれるのか？」

「ああ、まだ一応といった程度だが。……さてと、そうと決まったら『カイル』のことを何とかしないと。手ぶらで飛ばされて来たみたいだから」

メリナはやれやれといった顔でカイルを見た。だがその表情にはさきほどまでの刺はない。何かしら彼女の中でカイルのことを認めたようである。その事実気づいたカイルはほっと一息ついた。

実際の話、カイルは手ぶらも同然だった。ウィンドウが出せない以上、その中に収められているアイテムやお金は出せない。それにもし出せたとしてこの時代――もはや違う世界とも言えるほど未来だろう――でも価値があるかは怪しいものだ。ここでメリナが何かしてくれるというのなら、カイルにとってこんなありがたい話はない。

「うーんそうだな、この部屋の隣にほとんど物置状態だが空いてる部屋がある。片付ければ寝られるはずだ。今から片付けをして今日はそこで寝ると良い。明日からのことは明日になったら考えよう」

「ありがとうメリナさん！　そうさせてもらっよう」

「勘違いするな。私はカイルがもし野垂れ死にしたりしたらわ・た・しの寝覚めが悪いから面倒をみるだけだ。そのところを履き違えるなよ！」

――その後、カイルはメリナの案内で隣の部屋へと移動した。部屋の中は「物置状態」とメリナが言っていただけあって、大量の物が散乱して足の踏み場もない。しかし、部屋自体は物置として造られたものではないらしく、日当たりの良い住み心地の良さそうな部屋だった。特に年季の入った木の風合いがなんとも良い感じた。

こうしてうまく生活拠点を得たカイルは、その日の夕方まで部屋の片付けをしたのだった――

第二話 たぶん信用されたい（後書き）

ポイントが結構伸びてきているようです。

読者の皆さん、ありがとうございます！

第三話 ギルドへ行きませう

白。世界はそれ一色だった。塗り潰されたような、のっぺりと均質な空間が広大無辺に続く。光り輝くような白はどこか圧迫感にあふれていて、世界を押し潰しているようだった。その様はあたかも、白だけがすべてで他はないと言わぬばかりである。

カイルは気づいたらそんな世界にいた。紅い世界とは違い、おどろおどろしい光景ではない。しかし彼は何か得体の知れぬものを感じていた。

「今度は白か……？ なんでいつもこう……」

カイルは独り言をつぶやきながら、ゆっくりと歩いた。方向さえも満足にわからない世界を、彼は一步步進んでいく。すると彼の前方に淡い光が灯った。

光は暖かな気配に満ちていた。それはだんだんと膨らみ、拳大だったのがやがてカイルと変わらないぐらいの大きさとなる。大きく膨らんだ光はやがて人型に変化していった。

光はついに少女となる。水晶のような透き通る蒼髪と、新雪のような肌を持つ少女だ。彼女はカイルの方をみると、華奢な首をこくりと曲げる。

「きつ、君は一体……！？」

「……私は何者かは言えない。それはあなたが自ら知るべきこと。ただ一つ言えることは、私はあなたの味方……」

「じゃっ、じゃあここはどこなの？ 君なら知ってるだろう！」

「ここはあなたの無意識下にある世界。夢の世界よりさらに深い真つさらな世界よ。今回はあなたと話がしたくて私が呼んだの……」

「呼んだ？」

カイルは訝しむような顔になった。少女はどこか申し訳ないような顔をして、しょんぼりと頭を下げる。その悲痛な表情に、カイルは深い事情があるのかと悟った。

「どんな話があるの？」

「あなたに伝えたいことは一つ。きたるべき時がきたらアルガイネに来て欲しい。裁きの時は近い」

「裁きの時？」

「そうよ、咎人が蘇るの。奴らを倒すには始祖の生き残りであるあなたの力が……。まずいわ、誰かあなたを起こそうとしている……」

「ちよ、ちよっと……！」

少女の姿が透けていき、あっという間に空間に溶けていってしまつた。カイルは焦って手を伸ばすものの、少女の姿は捕らえられない。そして次の瞬間、カイルの意識は急速に浮上していった――

「……起きろ！ 起きないか！」

「……ふわああ。あれ、女の子は？」

「何を寝ぼけておるのだから。ほら、さっさとギルドへ行くぞ。お前が寝過ぎたせいで遅刻寸前だ！」

怒りで爆発したメリナの表情を見て、カイルは昨日のことを思い出した。昨日、カイルはメリナが登録しているギルドという施設に出かける約束をしたのだ。

メリナの話では、ギルドというのはゲームなどに良くある傭兵幹旋所のような施設らしい。主にモンスター討伐などの依頼がつねに出されていて、登録者たちはそれをこなして報酬を得るそうだ。メリナもこうして、生計を立てているようである。

腕にそれなりの自信があったカイルは、メリナの話を聞いてそこに行ってみることにした。ひとまず登録して依頼を受け、金を稼ぐのだ。しかし依頼は無限にあるわけではないので良い条件のものから順次なくなっていく。そのためカイルたちは早朝から出かけなければならなかった。

「ああっ、ごめん！ いますぐ準備するからちよっと待ってて！」

「まったく、できるだけ早くするんだぞ！」

メリナは足を踏み鳴らして部屋から出ていった。カイルは彼女がいなくなっただけを確認すると、すばやく着替えを始める。彼は飛

ぶよ々な勢いで服を取り替えていつて、みるみるうちにローブ姿へと着替えを終えた。本来はウィンドウを使って一発なのだが、今はこうするしかなかった。

「お待たせ！」

「よし、さっそく行くぞ！」

カイルとメリナは家を飛び出すと、階段を転がるような勢いで降った。彼らはそのまま通りに突入すると、朝の街を疾走していく。途中で家の下の店から声がかかったが、彼らはそれをひとまず聞かなかったことにした。

カイルがかなり寝過ごしたが、実際にはまだ早朝といって良い時間だった。太陽は昇ったばかりで、まだ朝焼けが続いている。それなのに紅く照らされた街は人でいっぱいだった。通りは多数の通行人で占領されている。その中を二人は人波を突き破るように激走していった。

通行人の中には普通の人間ではない者たちまでいた。耳が伸びたもの、しっぽが生えたもの、はたまた人の姿をした動物というような者までバリエーションは実に豊富だ。カイルはその姿をじっくりと観察したいと思ったが、ここは我慢だと走り続けた。

そうして走っていると、いきなり視界が開けた。通りの両端にあった高い建物がなくなり、広場のようになっている。かなり広い広場で、中心には丸っこいモニュメントのような物まで置かれていた。

カイルはその広場の先に見えた建物を見て、思わず目を疑った。およそカイルのイメージしていたギルドの建物ではなかったのだ。

だがメリナはその建物の門の前で足を止め、息をつく。

「ふう、ついたぞ。何とか他の連中より早く来れたな」

「あの…… 本当にここなの？」

「ああ、間違いなくここが魔法ギルド『青の旅団』の本部だぞ。何かおかしいか？」

「いや、だってこの建物はどう見ても……」

どつしりと視界を占める重厚なたたずまい。さながら山を削ってきたようなその建物からは、三つの尖塔が伸びて天をつく。さらにその建物の周りを、歴史を感じさせる強固な壁が幾重にも取り囲んでいた。厚いところでは数メートルはあろうかという、それはそれは頑強な壁がだ。

カイルが目にした建物。それはどうみても、古びた城のようにしか見えなかった――

第三話 ギルドへ行きませう（後書き）

何が起こっているんだ……。

アクセスとポイントの伸びがすごくてびっくりです！

皆さん、評価して下さいって本当にありがとうございます。

第四話 受付は官僚系です（前書き）

アクセスが倍に増えた……！？

何^が起きてるのでしょうか、ちょっと困惑気味です（汗）

第四話 受付は官僚系です

高く広がる吹き抜けの大空間。白ちやけた石のアーチが天井を形作り、そこから豪華なシャンデリアが下ろされている。その縦長の
大広間の奥では意匠をこらしたステンドグラスが、七色のパステル
カラーの光を投げかけていた。

ステンドグラスのすぐ下から下がっている巨大な垂れ幕。滑らか
で艶のある、青いビロードのような素材のそれには少々変わった紋
章が描かれていた。六芒星型の魔法陣の中に、本が置かれていると
いうデザインだ。その本の題名にあたる部分には『青の旅団』と記
されている。

「ここがギルド……中もやっぱりなんかイメージと違うなあ」

「そうなのか？ この大陸にある大手のギルドはだいたいこんな雰
囲気だぞ。カイルのいたところではやっぱり違うのか？」

「僕の故郷だと酒場みたいなところが多いかな」

カイルは遠くを見るような顔をしてそういった。彼にとって、ア
ルカディアの中でもギルドは特に思い出の多い場所だ。お金稼ぎや
素材稼ぎなどで、その存在は欠かすことができないのである。その
ためたくさんあるギルドに関する思い出を、彼は思い出していた。

メリナはカイルの話を聞いて、ふうむと首を捻った。彼女にとっ
て酒場風のギルドというものは、いまいちイメージにくいようだ。
この大陸では城までとはいかなくとも、各ギルドは専用の屋敷など
を保有していることがほとんどなのである。

「それはまた……。大昔はこの大陸のギルドもそうだったらしいが、今はそんなとこ見たこともないな。……ってゆっくり話をしている場合ではないか。ほら、受付に行くぞ。さっさと登録しなければ」

「ああつ、はいはい」

メリナはカイルを連れて広間の奥へと移動した。すると広間の端に、受付カウンターのような場所が見えてくる。光沢のある木製のカウンターが壁から飛び出して、その周りにはコルクボードが張られていた。その近くにはいくつか椅子が並べられていて、そこだけ雰囲気がわずかに違う。

そのカウンターの脇には背の低い、華奢な少女が座っていた。彼女はふんわりした碧の髪を揺らして、こちらに振り向いてくる。朝だから眠いのか、その小さく整った顔は憂鬱そうだ。

「おはよう……。早いわね。でも残念、星クラスのクエストはないわ」
「違う違う、今日は私が依頼を受けに来たんじゃないんだ。こっちの男を登録して欲しくてな。保証人には私になるから、すぐ登録してやってくれ」

「わかったわ。だけどその前に、その子とあなたはどんな関係なの？　もしかして春でも来たの？」

少女はからかうように言った。その紅い瞳はニヤニヤと笑っていて、悪戯っ子のよう。顔からは眠気が消えていて、すっかり目が覚めたようだった。

その一方で、カイルは頬を赤らめた。彼は恥ずかしそうにしながらも、少女の発言を否定するべく声を上げようとする。しかしその時、予想外の言葉をメリナが放った。

「春が来た？　こんな時期なのだ、来ていて当然だ。というよりも夏だろうに」

少女とカイルが固まった。二人の心を極地のような冷たい風が吹き抜けていく。だが、少女の方はすぐに気を取り直すことに成功した。

「……相変わらずの脳筋。メリナに期待した私がいけなかったわ。……それはそうとしてそのあなた、名前は？」

「カイル、カイルって呼び捨てで良い」

「じゃあカイル、こっち来て」

少女はカイルをカウンターの前の椅子に座らせた。彼女自身はその向かい側に座り、カウンターの中をがさごと漁る。そして少ししてから、少女は十枚ほどの書類を取り出してカウンターの上に置いた。

「まず登録作業をする前にはじめまして、私はミースよ。このギルドに所属する魔導士で事務方を仕切らせてもらってるわ」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ。えっと最初は住所、氏名、年齢の確認からね。名前は聞いたから住所と年齢だけ言って」

「住所はメリナさんの家で居候。歳は今年で十五だよ」

「そう、じゃあ住所はメリナと同じで歳は十五なのね。わかったわ、書類に記載しておく。ちょっとまって」

ミースは万年筆のような筆記具を取り出すと、書類に次々と記入していった。その作業は流れるようで、手慣れたもの。事務方を仕切っているだけのことはあった。

彼女はこうして手早く書類の記入を終えると、今度は下から大きな水晶球を出してきた。明らかにその小さな手にはあまる大きさのそれを、彼女は抱えるようにして持ち上げる。そして水晶球が置かれた瞬間、地震のような揺れがカウンターの上を襲った。

「ふう……保証人がいるからあとは魔導書の登録だけよ。あなたの持っている魔導書を出して」

「あの……僕は魔導書は持ってないです」

「え？ もう一回」

「だから魔導書を持ってないんですって」

ミースの顔がにわかに険しくなった。彼女はそのまま額に手を当てて天を仰ぐと、メリナの顔を凍えるような瞳で睨む。その表情たるや、まさに鬼だ。

「メリナ、どういうこと？」

「カイルの言った通りだ。あつ、でも大丈夫だぞ。なんでもカインは別の大陸から来たとかで、書がなくても魔法が使える。だから問題ないだろう」

「はぁ……あきれた」

ミースはくたびれたような顔をしてメリナとカイルを見回した。そのあと彼女はよたよたと椅子に座り込み、肩をすくめる。そのやる気のない様子はこりやダメだ、とでも言いたそうなくらいだ。

「……メリナ、それってどれくらい本気で言ってる？」

「私はつねに百パーセント本気だ」

「あなた……このギルドは魔導士しか入れないの。それくらいさすがに知ってるわよね」

「もちろん！　だがカイルは魔法が使えるから魔導士だろう？　なんの問題もないはずだ」

ミースはそれを聞くと無言で立ち上がった。彼女は機械のようにすたすたと歩くと、カウンターの端からある本を持つてくる。百科事典のような分厚い本で、その黒い表紙には金文字で『青の旅団規則全集』とかかれていた。

ミースはその本を勢い良く開くと、そのままの状態でメリナの方に持って行った。そして無表情のまま本をメリナに向かってドンと突き付ける。メリナはあまりの剣幕に驚きながらも、ミースの細い指が示している一文を読んだ。

「なにになに……魔導士とは魔導書を用いて魔法を行使する者のことである……」

「そうよ、だから魔導書を保有していないと魔導士とは言えないの。だから残念だけど……カイルの登録を認めるわけにはいかないわ」

ミースはきつぱりと断言してしまった。その態度に揺らぎはなく、取り付く島もない。これにはメリナだけでなくカイルも呆然として困るしかなかった。

カイルの異世界生活、二日目にして早くも赤信号が点ったようです――

第五話 喧嘩は枕で終わる模様（前書き）

日間ランキング3位！

ぐっ、重圧が。でも頑張りますよ！

第五話 喧嘩は枕で終わる模様

「……覚悟できてるの？」

「ふつ、そつちこそ事務ばかりしてて腕が鈍ってないか？」

「そんなことは万に一つもありえない」

「ならよかった、存分にやれるな……」

ギルドの大広間の中心で、激しく火花を散らせるミースとメリナ。その瞳には灼熱の炎が燃えたぎっている。互いに刺すような目つきで相手を睨んでいて、まさに一触即発。二人の周りだけ空気が張り詰めていて、違う世界のようなのである。

カイルは二人から少し離れたところで、困った顔をしていた。仲裁しようにも二人は聞く耳を持たず、かといって力で押さえ込むのも気が引けた。強引に押さえればこの場は良いかもしれないが、あとで揉めそうなのが付き合いの短い彼にも見て取れるのだ。

しかもたちの悪いことに、後からやって来た魔導士たちは今にも戦闘を開始しそうな二人を睨し立てていた。直接声をかけてみたり、外野で大騒ぎをしたり。中には二人の勝敗で賭けを始める猛者までいる。

「どうするんだよ……この状況」

カイルは辺りを見渡すと、目を薄く閉じて顔をくしゃくしゃに歪めた。そして現実逃避からか、どうしてこうなったのかをゆっくり

思案し始める。

きっかけはささいなことだった。きっぱりと登録を断られたので二人が一旦家に帰ろうとした時、メリナが小さく愚痴を零したのである。曰く「ミースの鋼鉄頭にも困ったものだ。こんなことからみんなに人気がないんだ」と。

これをミースが地獄耳を発揮して聞き取ったのがきっかけで、再びカイルを登録するしないで大喧嘩が始まったのだ。その喧嘩はだんだんとエスカレートして、ついに当のカイルをほったらかしにして二人の決闘騒ぎにまでなった。

「さて、やるか」

「……ええ」

二人はそれぞれ懷から本を取り出した。青いカバーの被せられた、辞書ぐらいの厚さの本だ。二つともかなり年期が入っていて、ページの部分が茶色く変色している。だが装丁は非常にしっかりしているようで、本自体は損傷などはない。

- - あれが噂の魔導書か？ 疑問に思ったカイルはそういう状況ではないと感じつつも、小声で呪文を唱えた。解析呪文アナライザー、アルカディアでは初級に属する呪文だ。しかし、その効果はレベル依存のためカンストしているカイルならたいいていのものは解析できる。

「おわっ……なんだこりゃ……」

頭の中に何かが流れ込む感覚。アルカディアでは専用のウィンド

ウが出たが、この世界では直接頭の中に情報が入って来るようだ。カイルはその慣れない感覚に、軽い偏頭痛を起こす。わずかだが、めまいも彼を襲った。

しかしその痛みもすぐに治まり、彼は入ってきた情報を確認できた。するとこんな情報が頭に浮かんだ。

名称 魔導書インフェルノ

性能 形態移行、能力フィードバック、自己修復、自己成長、自己進化、魔力チャージ、ソウルリンク

頭の中に情報を表示する画面が浮かんでいるような感じだった。この画面はパソコンのようで、それぞれの言葉はよりくわしい情報にリンクしているのがカイルにはわかる。

カイルはそれぞれの言葉――特に性能――についてより詳細な情報を調べようとした。だが、ギルドの中がにわかに剣呑な雰囲気となってくる。彼は慌てて作業を中断し、思考を頭の奥から引き揚げた。

「いくぞ、リンクオン！」

「……リンクオン！」

二人の足元に魔法陣が浮かび上がった。淡く輝く光の円と直線が縦横無尽に交差して、複雑な紋様を形作っていく。浮かび上がった古代の魔法陣はうごめくように脈打ち、七色の魔力が場にあふれた。

二人の持つ魔導書が光を帯びた。白い強烈な輝きを放ちながらそ

れは姿を変えていく。その変化は彼女たちの身体にも及び、光が全身を包んでいった。

危険を感じたカイルは急いで、自身の持つ最大の拘束呪文を唱えようとした。だがその詠唱は長く、間に合いそうにない。しかしその時、彼女たちに向かって白い何かが飛来した。

「枕……？」

白い物体の正体はなんと枕だった。ミースもメリナも発動しようとしていた何かを中断して、枕が飛んできた方角に振り向く。するとそこにはナイトキャップを被り、水玉模様のパジャマを来た勝ち気な雰囲気少女が立っていた。

「二人とも何をやっとするんや！ あんまりうるさいから三階まで響いて来たで。何をしとったのか、聞かせてもらおうか？ ……あらかじめ言うけど、うちの二度寝を邪魔した罪は重いで」

「マスター！ いや、これはなんでもありません。なあ、ミース？」

「ええ、なんでもなかった……わ」

二人は急に態度を改めた。それだけではない、周りの人間たちも少女の姿を見ると明らかに態度を変える。そしてどこかほつとしたような顔をした。

「マスター、遅かったじゃないか。もう少しでガチな喧嘩が始まりそうだったぞ」

「ほんとほんと、いくらなんでも寝過ぎっス」

「最近とっても急がしゅうてな。それで寝不足だったんよ」

少女は周囲の声に軽い調子で答えながら、当事者二人に近づいていった。彼女はそのまま二人の肩を抑えると、半ば強引に近くに転がっていた椅子へと座らせる。そして何やら、二人と話を始めた。それは端から見るとかぎりお説教のようである。

「……なるほど、喧嘩しとっただいたいの理由はわかったで。そういうことなら……。君、ちょっとこっちに來てくれへん？」

「はいはいっ」

少女に呼ばれたカイルは速足で彼女の元へと移動した。少女は移動してきた彼を誘導すると、目の前の椅子に座らせる。彼女はカイルが座るとすぐに、値踏みするような目で彼を見つめた。その視線は鋭く、また顔に似せず老獪なものであった。

カイルはその視線を真っ向から受けて立った。すると少女はまず意外そうな顔をして、次にいきなり話を切り出す。その時、声はわずかに上擦っていた。

「今の視線を受けて平気なんか……ただ者ではないね。なあ、君はこのギルドに本当に入りたいんか？　せやったらある試験をクリアできれば、ギルドに入れたっても良いんやけど」

「もちろん入りたいよ。そのある試験って何です？」

「もう、せっかちな。でもそういうの、嫌いではないよ。それである試験っていうのは――」

少女はにやりと口元を歪ませた。彼女はさらに、もったいぶるように咳ばらいをする。そうしてゆっくり間を置きながら口を開いた。

「そのある試験って言うのはな、うちことこのギルドのマスター、アリアと戦うことや」

第六話 やり過ぎには注意せよ

夜の森のようなずっしりと重い沈黙。アリアの言葉を聞いたカイルは身体をすくめて、深く息をすった。彼は両腕を組んで意識を思考の海に沈めていく。

カイルにはアリアの強さがわからなかった。PK対策などのため、人間には解析魔法が使用できない。そのため強さの識別は今まで培ってきた「勘」に頼るしかないのだが、アリアはいまいち不明だ。

そうしてカイルが考え込んでいると、話を聞いていたのかメリナとミースが近づいてきた。二人は愕然とした顔をアリアに向ける。

「マスター本気ですか？ カイルはたしかに強いですが、いくらなんでもマスターの相手は無理です！」

「無茶苦茶、一方的すぎるわ」

「まあまあ、何も勝て言うてるんじゃない。戦って実力を確かめたいいうだけなんや」

「ですが……！ もっつ！」

アリアに尚も食い下がるうとしたメリナの口を、カイルの手が押さえた。彼はモガモガと騒ぐメリナを押さえたまま、アリアに向かって微笑む。その目つきは不適かつ挑発的だ。

「戦います。それで僕はあなたに勝つ……！」

「これは……アハハ、たいした大物や！ 気に入ったで！ そんなら明日の午後三時にギルドの連武場に来てや。その時は本気で相手したるから！」

「わかりました、必ず行きますよ」

アリアは笑いながら去っていった。その小さな後ろ姿が見えなくなったのを確認すると、カイルはようやく押さえていた手を離してやる。メリナは金魚のように口をパクパクさせると、カイルを激しく睨みつける。

「カイル、正気なのか！？ 見た目に騙されたのかも知れないが、マスターは二つ星の魔導士だぞ。このギルド最強、大陸でもトップクラスの魔導士なんだ！」

「強いのはわかってたよ。でもみんなが僕の実力も知らないのに一方的にヤラれるとか言ってるさ。どうしても我慢できなかったんだよ」

「お前……もしかして見栄で言ったのか！」

「もちろん勝算はある。負けるつもりはないよ。それでも故郷ではそれなりに有名だったからね」

「なら良いが……。心配だなあ……」

メリナはまだ何か言い足りない様子だったが、すごすごと引込んでいった。その顔は明らかに、カイルの実力を不安に思っているように見える。それを見たカイルは、かなり消化不良のような感じがした。

一方、ミースは誰かに話を聞かれていた。黒いコートを着た痩せぎすで、頬に傷のある男だ。彼女はどこか嫌そうな顔をしながらも、事のいきさつを男に話す。すると男は、にやつきながらカイルたちの方に近づいてきた。

男はカイルの前に立つと、フツとメリナにからかうような視線を送った。彼はそのままカイルの肩に手を置くと、人懐っこく笑う。そして周囲にわざと聞こえるように大声で叫んだ。

「よう坊主、お前マスターと戦うんだってな！ 悪いことはいわねえ、やめとけ！」

「マジかよ！ ガハハ、ありえねえ！」

「ブハっ、本気か！」

周囲の魔導士たちは大騒ぎを始めた。彼らはカイルたちへの遠慮などなしに爆笑を始める。男も女も豪快に、それこそ腹を抱えている者もいた。

「おいっ、そんなに騒いでやることないだろう」

「なんだメリナ、もしかして……？」

「何を疑っている？ カイルはただの居候だぞ」

メリナはすっぱりと言い切った。頬を赤らめたり、どもつたりということはない。本気でただの居候とは思ってないようだ。だがそのことに気づいても、男はなんだかんだと騒ぎつつける。

「いい加減うつとうしくなってきたな。よし、ちょっと脅かしてみるか……」

カイルはしつこく騒ぐ男を面倒臭そうに見た。彼は周囲に聞き取られないように、小声でかつ素早く呪文を唱える。にわかには彼の瞳が燃えて、黒から紅へと変化を遂げた。その視線は普段の柔らかいものからいっぺんして、狂暴な迫力が溢れ出す。

威圧呪文「イビルアイ」。モンスターやプレイヤーを「怯え」状態にして一時的に動きを止める呪文だ。その効果は対象とのレベル差に依存している。もっとも、効果はたいしたことないので、アルカディアではネタ魔法ぐらいにしか認識されていなかったが。

しかし、そのネタだったはずの魔法は驚異的な威力を発揮した。彼の周りの空気は一瞬にして肌が焼けるような雰囲気になる。彼自身の気配はにわかには膨れ上がって、悪魔のようだ。その姿も蜃気楼のように揺れて、巨大な影の幻さえ見える。さながら、今のカイルは姿なき悪魔が憑依したかのよう。

場は静まった。魔導士たちの身体はカタカタと揺れ出す。蒼白になりながら痙攣するその様は瀕死の病人のようで、今にも生き絶えそう。彼らは口からワタワタと、蟹よろしく泡まで吐き出す。

……しまった、効き過ぎた！ 慌ててカイルはディスプレイを唱えた。一瞬にしてカイルの気配は穏やかになり、さきほどまでの悪魔のような凶悪さは瓦解する。

「こりゃあ驚いたぜ……。坊主、今のはなんだ？」

「今のはまあ、ちょっとした魔法です……」

「あれがちょっとしたねえ……。これなら書なしでもマスターに勝てるかもな。……ちょっとこつちこい、俺が明日までに対魔導士の基本的な戦い方ってのを教えてやる」

「えっ」

「いいから、マスターに勝つつもりなんだろう？　だったらこつちだ！」

男はカイルの手を引っ張って、強引にどこかへ連れて行こうとする。カイルはそれに戸惑いながらも、男の強い力で無理に引っ張られていった。しかしその途中で、メリナが男を止めようと立ち塞がる。

「こら、カイルへの訓練なら私がするんだ！」

「いや、メリナより俺の方が良いだろ。マスターの魔導書は遠距離タイプだからな、近接のお前より遠距離の俺の方が適任だ」

「それはそうだが……」

「じゃあ坊主は俺が預かっていくぜ」

男はカイルを引っつかんでどこかに連れて行ってしまった。それをメリナは呆れたような顔で見送る。その表情が、どこか寂しく見えたとはいえない。

その時ミースはカウンターの中からカイルの姿を見ていた。その消えていく姿に彼女は薄く口を開き、微かにつぶやく。目は細まり鋭く、顔には額にはしわが刻まれていた。

「さっきの異常な気配。彼が偽典に記された最後の始祖なの……？
とりあえず要観察ね……」

ミースのつぶやきは誰にも聞き取られることなく宙に溶けた。それが何を意味するのか、今は誰にもわからない――

第七話 魔導書はステキアイテムのようだ（前書き）

ポイントの伸びが……あわわ。

やれるだけ頑張りますので、これからもお願いします！

第七話 魔導書はステキアイテムのようだ

四方を頑強な壁に囲まれた空間。地面には大きな魔法陣が描かれていて、なにかの魔法を常時発動している。ちよつとしたホールぐらの広さであるそこには、凜とした独特の雰囲気があった。

カイルは男によってここに連れてこられた。最初は戸惑っていた彼も、最後にはおとなしく連れられてきたのだ。……要は、男の強引さに負けたのである。

「ここが連武場だ。訓練用に特別な魔法が施されていてな、この空間で使われる魔法は戦略級の殲滅魔法でもない限り非殺傷化される。今から坊主には明日に備えて訓練してもらうぞ」

「……あの、なんであなたが僕を訓練するんだ？ 理由がわからないんだけど……」

「俺は坊主に期待しちまったんだよ。お前なら本気でマスターに勝てるかもってな」

「それって……どういうことだ？」

男は困ったような顔をした。彼は説明しづらいことでもあるのか、口をもごもことさせる。そして小声でぶつぶつ言った後、彼はカイルに向かって口を開いた。

「いまいち説明しづらいんだが……。マスターはいまだに負けたことがないんだ。あの人はまさに戦いの天才でな、あの歳で世界最強クラスなんだよ。だが、はつきり言って負けを知らない人間は危険

だ。マスターに限ってないと思いたいが、最悪調子に乗っていつか自滅しかねん」

「なるほど、だいたいわかった。だからあなたは僕を訓練してまで勝たせたいわけか」

「そういうことだ、利用するみたいで悪いな」

男は軽くだが頭を下げた。その顔には一瞬だけだが、無力感と罪悪感とが同居していた。カイルは男の気持ちを察すると、できる限りの笑顔で彼に応える。

「いえいえ、そういうことなら構いませんよ」

「そうか、ありがたい。俺はゲーツだ、短い間だが頼むぞ」

「よろしくゲーツさん」

ゲーツとカイルは互いにがっしりと握手を交わした。カイルの手に、ゴツゴツとした男らしい手の感触が残る。その感触は、女の子の手のような良いものでは決してない。しかしその暖かさは、カイルにとってはなんとなく心地好いもののような気がした。

「よし、時間もないからさっそく始めよう。まずカイル、お前は魔導士についてどれだけ知っているんだ？」

「魔導書を使って戦うということぐらいしか知りませんね……」

「そうか。ならばとりあえず、マスターと同じ遠距離型の魔導士と戦うのに必要な知識だけを詰め込もう。今日のところはそれぐらい

しか教えられそうにない」

「それで構いません。お願いします」

「わかったそれでは説明を始めよう」

ゲーツは教師のように咳ばらいをした。教えるということに慣れていないのか、わずかだが緊張が見て取れる。一方、カイルの方もどんな話がされるのかと姿勢を正した。

「遠距離型の魔導士はその火力が特徴だ。マスタークラスの魔導士ともなると、人間など一撃必殺の領域だな。まずはそれに気をつけねば話にならない」

「ほうほう、ということは距離を開けちゃダメだね。つねに接近してないと。いかに距離を詰めるかが問題になりそうだなあ」

「まあそうなのだが……それだけでは不十分だ」

「……？」

アルカディアでは、魔法使いというのは完全な遠距離専門キャラだ。距離を詰められてしまうとまず積んでしまう。一部近接スキルにポイントを割り振ることで、近接戦闘に対応しようとしたプレイヤーもいたにはいたが、そういうのはネタキャラにしかなくていい。

なので対魔法使いの戦闘においてはいかに距離を詰めるかが課題であった。逆にいうと、それ以外はさほど重要な要素ではない。だが、ゲーツの様子を見る限り、対遠距離タイプ魔導士においてはそ

れだけではないようだ。

「マスターの場合、近づく者を自動迎撃するデコイを常に三つ周りに浮かべている。さらに強力な魔力障壁まで常時展開してるのだ。下手に近づくとそれらの餌食にしかならん」

「何と言つか、チートキャラ……?」

「ちーと? なんだそりゃ」

「……なんでもない、独り言です。でもそれだと能力次第で負けますよ。マスターの能力ってどれくらいですか」

「そうだな……書のレベルが百二十を超えたって最近聞いたな」

カイルの想定よりずっと低い数字。彼はホッと息をついた。百二十ならアルカディアで言うと、初心者と中級者の境目ぐらいのレベルだ。レベルキャップの五百までレベルを上げて、なおかつレア装備に身を固めているカイルの敵にはならないだろう。

カイルは心配して損したような気分になった。彼の顔には余裕が現れ、さきほどよりもずっとハツラツとした表情になる。

「なら大丈夫です。間違いなく勝てますよ。僕のレベルはもっと高いですから」

「本当か!? 驚いたな、書がなくてもレベルが上がる人間がいるのか……」

ゲーツは心底驚いたように目を丸くした。彼はカイルを珍獣でも

見るような目でみる。まったく、意外そうであった。カイルはそのゲーツの態度に、素っ頓狂な声を返した。

「どういうことですか？　ここだと書がないとレベルが上がらないんですか？」

「ああそうだ。書と契約しなければレベルは上がらないし、魔法も使えない。書のレベルが上がって初めて、それに比例する形で契約している人間のレベルも上がるんだ。ただし、大昔にいた始祖とかいう連中は別らしいがな……」

始祖という言葉にカイルは聞き覚えがあつた。夢で少女が言っていたのだ「最後の始祖」と。その言葉はカイル心の篩に引っ掛かつて、夢のことでありながら今もなお鮮明な記憶だ。

「――自分はやはり、この世界の人間とは根本的に何かが違うのだろうか。カイルは直感的に思った。彼は自分の胸に手を当てて、思わず考え込む。だがその時、彼の考えを中断させる言葉がその耳に飛び込んだ。

「……だがなカイル、お前のレベルがいくつか知らないが気をつける。マスターの場合、最大でレベル二百分ぐらいまでは能力が上がるからな」

「はいっ？　特殊な強化魔法でも使えるんですか？」

「そうじゃない。魔導書は人間の感情をエネルギーとして動くから、契約者の感情次第で能力が大きく変化するんだ。それを示すFゲージっていうものがあるんだが、マスターはそれで最大百八十パーセントまで能力が上がるかわかっている。平常時を百パーセント

としてな。当然、それに比例してマスターの能力も上がるわけだ」

- - なんだそりゃ！ 気合いとかで能力が上がるのか！ なんて熱血仕様だよ！

カイルは思わず叫びそうになった。おいおいというような顔をして、彼はゲーツの方を何度もみる。明らかにゲームではありえない仕様だからだ。もし実装していれば公式サイトあたりが大炎上しただろう。

だがその一方、心の奥底でカイルはこう思った。魔導書、すごく欲しいな……と。

第七話 魔導書はステキアイテムのようだ（後書き）

Fゲージに関してはかなり私の趣味です。私は難解な専門用語とかに憧れる厨 病患者なのですよ……。

まあ、魔導士たちが必殺技を叫ぶ理由づけのためとか、熱い展開の演出のためとか他にも理由はありますけどね。

第八話 女騎士は意外と器用

ゲーツとカイルの訓練は夕方近くまで続いた。だが時間こそ長かったが、訓練といっても基本的な事項の確認程度に留まり、カイルにとっては何のことはなかった。最後にゲーツが「カイルには俺の訓練なんぞ、ほとんどいらなかったぐらいだ」と言っただけだ。

訓練を終えたカイルはギルドの大広間へと戻った。するとなんと、メリナらしき女の姿がある。一つにまとめられた豊かな紅い髪と鈍い銀色の鎧は、おそらく彼女のものだろう。その夕陽に照らされた後ろ姿は黄金色に染まり、一幅の絵画のようだ。

しかし、彼女はカイルが後ろから近づいても反応しなかった。それをカウンターから見ていたミースが生暖かく微笑む。からかうような、いたずらっぽい目だ。それを確認したカイルは彼女の肩をポンと叩く。

「メリナさん？」

「おわっ！ いきなり声をかけるんじゃない。びっくりしたじゃないか！」

「ごめんね。……ところでそれは？」

「なんでもないっ！」

メリナは抱えていた青い何かを、すばやくテーブルの下に隠した。頬は紅くなって、慌てたようにそれを足元へと必死に押し込む。カイルはそれを見て、テーブルの下へと目をやるうとした。しかし、

そんな彼をミースが止める。

「……見ちゃダメよ」

「どうして？」

「それはメリナの黒歴史だもの……くすっ」

「こらっ！ 何を言うか！」

メリナはいきなり立ち上がると、ミースにドシドシと近づいていた。彼女はポカンとしているミースの頭をばかりと殴る。カコッと心地好い音がして、ミースは頭を抱えた。

「暴力反対！ これだからお猿さんもときは……」

「私のどこが猿だ！」

「知能」

「……もう良い！ 帰るぞカイル！」

「あつ、ちよつと！」

メリナは頬を膨らませ、足を踏み鳴らしながらギルドの城から出ていった。それをカイルは大慌てで追いかけていく。彼は城の前の広場でメリナに追いつくと、その手にあつた紙袋を指差した。

「その中には何が入ってるんですか？ さっき何か詰めてたけど」

「たいしたものじゃない。そのうちわかるから、それ以上言うな！」

「はいはい、わかったよ」

「本当にわかったのか？ 今日のところは良しとしておくが……」

メリナは疑うような目でカイルを見るが、またすぐにもとの凛々しい顔に戻った。それと同時に、カイルもまた彼女をからかうのをやめる。どこことなく、ぎこちないが良い雰囲気 flowed。

街は黄昏れに沈んでいた。太陽は昼の荒々しさから一変して寂しげな顔を見せ、どこか陰鬱。それに照らされる赤煉瓦からなるミニチュアのように整った街もまた、物憂い顔になっていた。道を行く無数の通行人たちは光を求める虫のように、家や商店の明かりへと吸い込まれていく。風はすでに夜のもので冷えはじめている。

メリナはその秀麗な顔を夕陽に染めると、カイルの方を見た。寂しさを内に秘めたような顔で。カイルはそれを見るなり、愕然としたような顔になる。

「あの、どうしたんですかメリナさん……？」

「夕陽を見てたら少し感傷的になってしまっただけ。……なあカイル、お前は寂しくはないのか？ 故郷にはもう、帰れるかどうかかわからないのだぞ」

メリナの目はどこまでも澄んでいた。透明な水晶よろしく、彼女の心が透けて見えそうなほどだ。それに目を奪われたカイルはありのままを彼女に話す。ゆっくりとわずかにどもりながら。

「僕は前からこういう所に来てみたかったんだよ。だからなのかな、今のところはそんなには寂しくないんだ。でも、そのうち会えないのが実感できてくると……」

「なるほど。だったらそういう時が来たら私に相談するんだぞ。もし夜中に一人で泣かれたりしたらうるさいからな……」

メリナの声にはいつもの覇気がなかった。だがそれを指摘するよ
うな者は誰もいない。そのまま二人は、影は寄り添わせつつもない
ようである距離を取って家に帰ったのだった。

時は何事もなく過ぎて翌朝。カイルはおとといのように変な夢を
見なかったたので、早めに起きることが出来た。柔らかいベッドから
起き上がった彼は、よたよたと隣の部屋へと移動する。

カイルが部屋に入ると、メリナがテーブルに突っ伏すようにして
いた。すぐに寝るつもりだったのか鎧は脱いでいて、代わりにパス
テルピンクのパジャマを来ている。その手元には危なっかしいこと
に糸や縫い針などがおかれていた。

カイルはメリナの顔の近くまでそれらが迫っていたため、慌てて
裁縫箱のなかへと押し込んだ。その時彼は、その裁縫道具の中から
出来たて青い熊のぬいぐるみらしき物を見つけた。

「カイル……？ 起きてたのか」

「まっ、まあね」

「……！　しまった、私は作業中に寝たのか！」

目覚めたメリナはここで状況を把握した。彼女は急いで裁縫箱などを片付けていく。だがその最中、カイルの手にある熊に気づいた。

「なんだカイル。もう見つけてしまったのか」

「すみません、見られなくなっただんですよね」

「いや、どちらにしろお前に渡す予定で作ったんだからな。構わんよ」

「えっ、僕にくれる予定だったんですか」

「ああ、熊は縁起が良いというからな。今のお前にぴったりだと思つて。……あくまで昨日、暇だったのと私の趣味だから作ったんだ。そういうことではないから勘違いするんじゃないぞ！」

メリナは熊のぬいぐるみをビシッと指差して宣言した。顔を真っ赤にして叫ぶその姿に、カイルは思わず背筋を伸ばして頷く。

「わかったなら良い。さてと、それじゃギルドへいこうか。ああ、ぬいぐるみは置いて行くんだぞ。壊れたら大変だ」

「はい、わかった……。あれ、でも戦いは三時からだよ」

「マスターは時間感覚がいい加減なんだ。ほら、この間だってパジャマ着てただろう。だから三時と言われてても早めに行っておくに

越したことはない」

メリナは一旦カイルを部屋から出してすばやく準備すると、ギルドへと向かった。カイルもそれに続いていく。この間とは違って余裕を持って二人はギルドの門へと到着した。

こうしてカイルはいよいよ、アリアとの戦いに臨むのである――

第八話 女騎士は意外と器用（後書き）

次回はいよいよバトルです！

……戦いまでいろいろと長くてすみませんでした。

第九話 カンストプレイヤーVS魔法少女

日が天頂を過ぎ、風が温い熱気を帯びる昼さがり。ギルド青の旅団の練武場では二人の人間が火花を散らしていた。片やはつらつとした栗色髪の少女、片や黒いローブを着た線の細い少年。対照的な二人は、穏やかな顔をしながらも目の奥で闘志を燃やす。

「さーて、そろそろ始めよか」

「そうだね。もう良い時間だ」

「それじゃ、その前に……リンクオン！」

少女ことアリアの持っていた本が白く輝いた。百科事典ほども大きさのある本が強烈な光を纏い、にわかに姿を変えていく。アリアの足元には紫に煌めく魔法陣が現れ、彼女自身をも飲み込み光を解き放つ。

アリアの服装が急速に変化していった。淡い桃色をしていたドレスの上で無数の光が弾けると、たちまち青を基調としたカラーリングに変化。スカートや上着が短くなって、白いへそや太ももがあらわになる。髪もまとまり、可愛い紅い髪留めで一つになった。

さらに服の上から彼女を包み込むように輝く青い装甲が現れる。関節や肩などを、流れる光の粒とともに流線型の装甲が覆い尽くす。近未来的でスタイリッシュなフォルムのそれは、軋むような鋭い音と同時にアリアの身体に密着した。

そのとき魔導書は細く華奢な光の杖へと姿を変えていた。やがて

その光は硝子のように砕けて虹色の粒となり、中から黄金色の中身があらわれる。豪奢にして繊細、稀代の職人が魂を捧げたような輝きを持つ杖。その先端には紅い宝玉が備わり、変化の完了を告げるように雷のごとき光を撃ち放つ。

「よしっ、戦装完了！」

アリアは杖を眼前に構えると凜々しく力強く叫ぶ。その勇姿を見たカイルは呆然としていた。彼の頭の中で、「魔法少女」という単語が無数にリフレインされる。変身機能は彼にとって完全に想定外だった。

しかし戦わないわけにはいかない。さきほどまでと違い、押し潰すような気配のアリアを彼は果敢に睨みつける。練武場の雰囲気は緊迫の度を深めていき、決戦はいよいよ間近だ。

「ほな、始めるよ！」

「いいよ、身体が疼いてたとこだ！」

戦端は開かれた。アリアの周りに三つの光弾が上がり、彼女の周りを巡る。カイルの目には見えないが、強力な魔力の壁もまた展開された。いずれもカイルの勝利を阻む凶悪な障害だ。

「世を吹き抜けし自由なる風よ。我が身に来たり、これを地の力より解き放て！ ウイングアクセル！」

カイルの身体が重さを失った。重力から解き放たれた身体は距離を忘れて疾走していく。その速さは音にも匹敵しそうなほどだ。

補助魔法ウイングアクセル、効果は対象一名の速度の上昇。効果時間、上昇する比率は使用者のレベルに依存。レベルカンストであるカイルが使用した場合は一分間速度二倍というものだ。

いきなり速度の上昇したカイルにアリアは驚愕した。しかしさすがはギルドマスターとでも言うべきか、すぐに彼女は必要な行動を開始する。そのふっくらとした唇は薄く開かれて呪文を紡ぎ始めた。

「っ……！ 天より降り注ぐは裁きの雷。我は我が身の敵を滅さんと欲す。今こそ神よ、裁きを！ サンダーレイ！」

驚くほど速く、正確に呪文は唱えられた。杖が青白い火花を散らせて、光がカイルへ向かう光条を描き出す。その速さたるや、まさに雷速。息もつかせぬうちにカイルはスパークした。夏の太陽を倍したような閃光が彼から発射されて、アリアは一瞬だが顔を緩めます。

「よっしや……なああ！」

「残念つと！」

光の中からカイルは無傷で現れた。彼はそのまま、アリア目掛けて一直線に加速していく。その時アリアはさすがに驚いていて、初動の対応がわずかに遅れてしまった。呪文を唱えることができずに、彼女はとっさに杖を構える。

しかし、遅れたアリアに代わって三つのデコイが敵襲に対応した。デコイは一気に飛び出すと、カイルに殺到していく。淡い光の螺旋を造り出したそれらは、彼の身体を穿たんとした。人の頭ほどの光の弾が、不規則なリズムでカイルを襲う。

次の瞬間、光は散った。一つはかわされ地面にぶつかり、一つは杖で引き裂かれ。最後の一つは魔法耐性の高いローブの表面で弾け跳んだ。地鳴りのような身体の底へと響くような爆発音が轟き渡って、耳がにわかに飾りとなる。

そんな最中、カイルは呪文を唱えていた。いや正確には唱え続けていたというべきか。彼はデコイが襲ってくる前に唱え始めた呪文を、冷静に唱え続けているのだ。その口はカイル自らを巻き込んだ爆発が起きたにも関わらず、速度を落とさず動き続けている。

――このままだと、負ける、負けてしまう……！

にわかにアリアの心に敗北への恐怖が芽生えた。迫りくる初めての敗北は恐怖を彼女にもたらしたのだ。その恐怖は彼女のもとと持っていた強い精神力を糧にして、一瞬のうちに成長を遂げる。心を埋め尽くしたそのアリアにとって未知なる黒い感情は、爆発的な感情の激流となって刹那、彼女を飲み込んでいった。

身体にかかる強烈な重圧や痛みのもと、アリアの視界の端に見えていたゲージの数値が急速に伸びていく。今や百パーセント前後だったその数値は、二百を超えようとしていた。

Fゲージと呼ばれるそのゲージ。これは魔導士が強い感情を抱けば抱くほど上昇し、それに応じた力を彼らに与える。だがその反面、負の感情によりゲージを上昇させた場合、魔導士の精神自体が崩壊してしまう危険を孕んでいた。

しかしそんな事情にはお構いなく、アリアの前でゲージは勢い良く上昇していった。その数値はいよいよ二百五十を突破して、三百に到達せんとする。だがその時、アリアにとって近いようで遠くに

感じられる場所から朗々たる詠唱が聞こえた。

「……我、行使するは光の力。闇を切り払い我が道を示せ！ ライトニング・スマッシュャー！」

カイルから放たれた圧倒的な光の波動。それは地面を裂き、空気を打ち破る。轟音とともに走るそれは、可視化するまでに強化されたアリアの防御魔法と激突した。

人間ほどの太さを誇る大出力の光線と、それを阻む薄緑の六角形が無数に組み合わさったような魔力のバリア。それは一時、拮抗を見せたがすぐに光線が勝った。バリアはまるで鉛でできた風船のように弾け跳び、アリアは光に染まっていく。

こうして光が収まった時、練武場にはクレーターができていた。そしてその中心には、目を回してしまったアリアがふらふらと立っていたのだった――

第九話 カンストプレイヤーVS魔法少女（後書き）

今回は微妙にシリアル（誤字にあらず）が入りました。

でも、すぐにもとの調子に戻る予定ですので心配なく。

第十話 高待遇、ゲットだぜ！

クレーターの中心でふらつくアリアに、カイルは顔を青くして駆け寄った。すでに変身は解けていて、彼女の身体は砂ぼこりまみれだ。しかし顔色は少し悪く目を回しているものの、彼女に外傷はなく問題はなさそうである。彼は近くから観察してそれを確認すると、ホッと息をつく。

するとアリアが、ふらつきながらカイルに抱き着いた。彼女はカイルの肩に手を回すと、彼の耳元でそつとささやく。かすれ気味だが、柔らかな春風のような声だった。

「完敗や……。ギルドへの登録、認めたるで。そうやなあ、仮にもうちに勝ったんやから準星ぐらいの待遇かな……」

「あの準星待遇ってなんですか？」

カイルは訝しげな顔をしてアリアに尋ねた。しかし、彼女は疲れた様子で笑うばかり。彼の質問になかなか口を開こうとしない。

「ごめんなあ、詳しい説明はしんどいからミースから聞いてや。準星待遇で登録を認めてもらえば、教えてもらえるから」

「わかった。そうしよう」

「そうしてや。まっ、とにかくにもおめでとさん」

アリアは精一杯の笑顔を見せると、ゆっくりカイルから離れていった。彼女はよたよた通路の方へと向かうと、その出入口の中へ消

えていく。カイルはそれを心配そうに見送ると、自身も通路へと走っていった。

ギルドの大広間では、メリナを始めとする三人が心配そうな顔をして座っていた。危険なので練武場の近くでの観戦は認められていない。そのため三人は大広間で吉報を待っていたのだ。彼らはそれぞれ険しい顔をして、指でカタカタとテーブルを叩いたり、しきりに足を組み替えたりしている。

その彼らが注目していた扉が、唐突に開かれた。重い木の扉が軋むと同時に、彼らの待ち焦がれていたカイルもその姿を見せる。三人は安心して肩を撫で下ろすとともに、矢継ぎ早に質問をぶつけた。

「怪我はないか？ 試合はどうだったのだ？」

「マスターには勝てたか？」

「……登録のことも忘れないで。ちゃんと登録の許可は下りたの？」

「ちょ、ちよつと待った。全部説明するからさ」

カイルは三人の質問を手で軽く制すると、近くの椅子に腰を下ろした。彼はそのまま、椅子を引きずるようにして三人に近づくとわかりやすく彼らに事の次第を説明しようとする。その時の三人の顔は、がり勉の優等生のように真剣だった。

「……僕はマスターに勝った。試合では怪我をしてないし、健康はまったく問題なし。それに登録についても準星だとかで認めてもらえることになったよ」

「……準星だと！」

メリナがテーブルを叩き、素っ頓狂な叫びを上げた。ゲートもミスもそれに続いて、目を丸くする。さらに話を立ち聞きしていたらしい他の魔導士までもが、ザワザワと騒ぎ出した。彼らはいずれも驚いたのか、興奮して口調が強くなっていた。その動揺した様子は、まるで自宅に隕石でも落ちたかのようなうだ。

「本当に準星なのか？」

「もちろん。確実にアリアさんはそう言ってたはずだ」

「信じられん……」

ゲーツはそのまま椅子に深く座り込むと、何も言わなくなってしまう。メリナの方も、動揺しているのか目をパチパチさせていていかにも落ち着きがない。仕方ないのでカイルは、まだ比較的落ち着いているミスに説明を求めた。

「準星ってそんなに凄いことなのか？　というより星ってなに？」

「……あなたはそういえばとんでもなく遠い所から来たんだっかね。仕方ない、教える。星というのは魔導士の強さの基準よ。上から順に三つ星、二つ星、一つ星、準星とあるわ。これはギルドや魔導士を統括している魔導書管理協会が定めたもので、どこでも通用する基準となるの。もっとも、二つ星以下は各ギルドのマスターが決めるけど……」

「それなら一番下の準星ってたいしたことないんじゃない？」

カイルは困惑して眉をひそめた。彼の頭の中を、思考の渦が駆け巡っていく。すると彼の中で少し嫌な考えが浮かんできた。

- - 下のランクならばこんなに騒ぐことないのではないだろうか。
むしろ一番下だから、嫌な意味で騒いでるのか - -

カイルの脳裏を黒い何かが過ぎる。するとその時、言葉を失っていたメリナが口を開いた。彼女はカイルに疲労感いっぱい顔を見せると、諭すように言う。

「……カイル、たいしたことないなんてとんでもない！ 星なしから準星にはよほどの功績がないと無理なのだぞ。例えば私が準星になった時には、レッドドラゴンを一人で倒したぐらいだ」

「それなら結構凄いなあ……」

「当然だ！ 大陸有数の実力派であるこのギルドでマスターの次に強い私でも、まだ一つ星だからな。二つ星で世界最強クラス、三つ星ともなると神話レベルだ！」

メリナはいつのまにか火を噴くような強い口調になっていた。彼女はそのままの勢いで、顔を紅くしながらもしゃべり切る。その突進してくるかのごとき迫力に、カイルは押されっぱなしになる。なのでメリナの熱弁の途中、自分をアピールするような文章が多々あったことには彼は気づいていない。

人間というものは周囲が取り乱すと逆に自分は冷静になるものである。今回もその例に漏れない出来事だったらしく、メリナが騒ぐと逆に近くのゲーツとミースは普段のようすにだんだんと戻っていた。特にミースは、メリナの話が終わるころにはすでにいつもの

冷静な彼女に戻っていた。

冷静になったミースは手際良く書類を準備した。彼女はカウンターのの中から必要な書類を取り出すと、次々に必要事項を記入する。そして最後に残った一枚を、未だにほわつとしているカイルの前に差し出した。

「これにサインして。あなたの国の文字で構わないから」

「えっ、ああすぐやるよ」

カイルは万年筆のようなペンを受け取ると、書類のサイン欄の上でしばしペンを止める。だがしばらくすると、彼は決意したかのように勢い良く『カイル』とカタカナで記入した。

ここで本名ではなく『カイル』と記入したのは、カイル自身のあの種の決意表明である。つまりこの世界でカイルとしてやっていくということなのだ。もちろん、帰ることを諦めてはいないのだけど。

こうして濃くはつきりとした字で名前を描いたところで、カイルはそれをミースに手渡した。彼女はそのカードを見るなり満足そうに笑う。そして彼女はカイルの方を向くと、いまだかつてないほどの微笑みを彼に向けた。

「これで登録は完了。おめでとう、準星魔導士としてこれからしっかり頑張って欲しい」

ミースの声の調子は普段と違って高めで暖かく、そこにはカイルに対する確かな祝福が籠っていた。さらにそれを聞いたメリナやゲーツが新入りを祝うべく、激しく手を叩く。その音の波及はギルド

中に広がっていき、やがてギルドにいた全員が手を叩き出した。

このようにしてカイルは、ギルド青の旅団に受け入れられたのであった――

第十一話 一万年と二千年前には……（前書き）

今回は世界観を説明するお話です。
なので説明が多いかも……。

第十一話 一万年と二千年前には……

青の旅団本部の大広間は、死屍累々たるありさまだった。男も女もあちこちでひっくり返っては、大いびきをかいている。その近くには酒瓶や酒樽が転がっていて、ツンと鼻をつくような香りが広間全体を覆っていた。

カイルがアリアに勝った日の夜は、青の旅団総出の宴会となった。新入りの歓迎会だと理由をつけて、酒好きな魔導士たちが飲めや歌えやの大騒ぎをしたのだ。宴会は延々と夜更けまで続き、たいていのものはその場で酔い潰れて眠った。この大広間の惨状はそれが原因なのである。

しかし宴会の主役であるはずのカイルは酔えていなかった。酒酔いも状態異常と見なされるらしく、そういったものを受け付けないスキルを保有している彼の身体は酔わなかったのだ。そのため彼はゲーツやメリナ、果ては途中参戦してきたアリアが気持ち良さそうに眠る横で少々眠れない夜を過ごしている。

「カイル、どうしてそんなに強いんやあ。うちにその秘密教えてや……」

「カイル……どうだ？ そんなに好きなら好きだけ良いのだぞ……」

「二人とも寝ぼけてないでちゃんとして……」

カイルは自分に寄り掛かってくるアリアとメリナを、とりあえず床に寝かせるため息をついた。二人とも浴びるように酒を飲んで

いたので、全身からアルコールの匂いが溢れている。酒が苦手どころか未成年で今日初めてそれを飲んだ、いや飲まされたカイルにはその匂いはきつすぎた。

そこで彼は、肺が焼けるような酒の匂いから解放されるべく一旦外に出ることにした。ちょうど練武場へ向かう途中の廊下を上がった所に、星を見るのにおあつらえむきのバルコニーがある。彼はしばらくそこで、星でも眺めて新鮮な空気を吸うことにした。

カツカツと硬い足音を響かせてカイルは廊下を歩く。壁に張られたガラスから、朧げな月明かりが彼の身体を照らし出した。黒いはずのローブも白に染まり、彼の細めの整った顔も白くなる。ところどころが少しかけてきている古い石壁までも、黄金色に見えた。

カイルは廊下の途中にある大きな扉を開けた。古びて端が若干削れた木の扉が軋みながら開くと、月がカイルの視界を埋める。白く冷たいようでありながらも、包み込むような優しさを感じさせる月。その蒼白な光に照らされたバルコニーには先客がいた。

碧の髪から淡い月光のカケラを振り撒き、紅い瞳で少女は空を眺めている。そのどこかはかない、夜桜を思わせるような小さな顔にカイルは確かに見覚えがあった。しかし彼は目を疑うかのように何度も少女を見る。

- ミース……なのかな？ いや、でも……

普段のミースとは雰囲気違ったことになっていた。さっきまでの彼女は美少女だったけど、ひどく所帯じみた感じがしていた。しかし今の彼女は、生活感や存在感というものが一切かけている。まるで夢から出てきた幻の少女のように……。

「ミース？」

「……あら。あなたも星を見に来たの？」

「まっ、まあそうかな」

「そう……」

ミースは一言返事をする、もとの雰囲気に戻った。カイルはその変化に少し目を丸くしたが、彼女の元へと歩いていった。バルコニーの突端で手すりに持たれているミースの元に近づくと、空に浮かんでいるような錯覚が彼を襲う。

彼はふわふわとした感覚に閉口しながらも、ミースの隣にたった。そして彼はミースにゆっくりとした口調で話かける。

「ミースも眠れなかったの？」

「ええ、お酒は苦手。がぶ飲みする馬鹿の気が知れないわ」

「そうなんだ……。それより月が綺麗だね。掴めそうないだよ」

カイルは空に浮かぶ大きな月を見た。地球では十円玉ほどの大きさでしか見えない月も、この世界では人の顔ほどもある。遠くにきたものだ……。彼は改めてそう感じた。

カイルはそうして寂しげな顔をした。するとミースはそれをじっと見つめる。そして彼女は再び月を見ると、微かに唇を開いた。

「……遙か昔、始祖文明の頃はあの月まで実際に行った人がいたそう。今は見ることにしかできないけど……」

「始祖文明……？　もしかして始祖って存在が築いた文明なのか？」

「そうよ。この世界のすべての知的生物の原点にして、真なる神の子の末裔である始祖。彼らが遙か昔に築いた文明が始祖文明なの。この文明は現文明にたいして旧文明とも呼ばれるわ。……でもどうしてこんなことを聞くの？」

ミースは見透かすような瞳でカイルを見つめた。その紅い瞳は月光を浴びて、いつそう鋭い輝きを増す。カイルはその迫力に一瞬、本当のことを言いたくなったがなんとか堪えた。

「……歴史とか好きなんだよ。旅先とかでもその土地の歴史を調べたりするぐらいでさ。ねえ、もっとその文明に関する話をしてくれないかな？　すごく面白そうだから」

「……わかったわ、もう少し話してあげる。何が聞きたい？」

「始祖ってどんな人たちだったのかな？　まずそれが知りたいや」

「うーん、一番難しいところね。彼らは神の子ですべての知的生物の祖とされているわ。ただ、その実態については良くわかっていないの。人間型のものに限らずエルフ、龍人型にいたるまで多種多様な種族がいたようだし……。ただ、彼らはほぼ全員自分たちのことを『プレイヤー』といったそうよ」

「プレイヤーだって！　その始祖ってのは誰か生き残ってないのか！」

カイルはいきなり激しい口調になると、ミースに詰め寄った。彼は彼女の線の細い肩に手をかけると、ぶんぶんと揺する。微かな手がかりを逃したくない、という必死の思いがその手にのしかかっていた。ミースはそんなカイルの極端に見開かれた目をみると、申し訳なさそうな顔になる。どこか罪悪感にも似たものが、そこには現れていた。

「……始祖は誰も生き残ってないわ。彼らの文明は正体不明の巨大生物に滅ぼされたの」

「そんな……でもエルフとかなら生き残っているじゃないのかな。僻地の森に住んでるし、寿命も長いから……」

「ダメよ。だって……」

ミースは口をもごもごとさせた。よほど言いづらい事実のようである。彼女はカイルの必死な顔をみると、なかなかそれを言い出すことができない。

しかしここで、カイルが表情を変えた。ぎこちないが、なんとか穏やかな表情を彼は取り繕う。これによってようやく、彼女は重い口を開けた。

「エルフや龍人とかの寿命はせいぜい千年ぐらい。それにたいして旧文明が滅びたのは約一万二千年前とされている。残念だけど……。始祖は誰一人として生き残っていないわ」

カイルの希望の光は脆くも、時の激流に流されていってしまった

第十二話 噂をすれば影……

ミースから衝撃的な事実を聞いたカイルだったが、その後は特に何事もなく翌朝を迎えた。眠気に負けてしまったのと、雰囲気がお寒い感じになってしまったからである。しかしさすがにシヨックだったのか、彼の顔は暗かった。

だが、その日の朝もギルドは何事もなかったかのように営業を開始していた。あれだけ大騒ぎをしても、朝が来たらほぼ全ての魔導士が元気に仕事を始めたのである。身体が資本の仕事であるだけに、二日酔いをするようなヘマをやらかすのは一部の人だけらしい。

当然、上位の魔導士であるメリナは二日酔いなどしていなかった。むしろ昨日よりも顔色が良いくらいである。そのため、彼女の居候で「体調的には」問題のないカイルが働くことを求められるのは当然で……。

「カイル、なんでそんなしけた顔をしているんだ？ まさか登録早々、二日酔いしたとか言い出すんじゃないだろうな！」

「そういうわけじゃないんだけど……」

「じゃあおとなしく働け！」

メリナはカイルの肩をわしづかみにして、カウンターの方へと引っ張った。その横暴な行動にはさすがのカイルも抵抗する。しかし力こそカイルの方が強いが保護者と居候。決着は見えていた。

「ミース、何か適当なクエストはないか？ できればカイルと二人

でこなせるものが良いのだが」

「ふああ……。ちょっと待って」

ミースは大きなあくびを一つすると、がさがさとカウンターの中を漁り出した。分類別に棚の中で山となっている紙の束に、彼女は目を走らせていく。しばらくして、ミースは一枚の依頼書らしき物を手に取った。かなり良い条件の依頼なのか、彼女の顔から笑みがこぼれる。だがその依頼主の欄を見た途端、彼女の顔が露骨に曇った。

「条件の良い依頼があるにはあった……。ただ……」

「ただ、何なんだ？ 私にもその依頼書を見せてくれ」

メリナはミースから依頼書を引いたくるようにして受け取った。彼女はその内容によくよく目を通す。じつと彼女の眉間にしわが寄って目尻が吊り上がる。そうして一通り内容に目を通すと、彼女は拍子抜けしたような顔をした。

「普通の依頼じゃないか。むしろ破格と言っていいぐらいだ。ほれ、カイルも読んでみる」

「あつ、ありがとう」

カイルはメリナから依頼書を受け取った。元がゲームのためか、カイルもこの世界の文字を読むことができる。なので依頼の報酬水準などは良く知らないが、カイルもとりあえず依頼書を読んてみた。

『調査の護衛求む！』

ガルテニア遺跡の調査を行いたい、中には強力なモンスターが棲息しているため私だけでは入れない。有能な魔導士の護衛を早急に求む

拘束期間は二週間

報酬は一万ルーツ

複数名での受注も可

連絡はシフィア一番街三の三まで

依頼主 魔導書管理教会技術三課・契約魔導士オルシア』

依頼を読んでみた結果、カイルには依頼主の肩書きがやたら長いということぐらいしかわからなかった。しかし、ミースはその依頼主の名前から別の情報も読み取っていたらしい。

ミースはカイルから依頼書を返してもらったと、その長い肩書きを指でなぞって見せる。それと同時に、彼女は渋い顔をした。

「協会の魔導士よ。しかも技術三課、特にろくでもない研究をしている部署の。契約とは言え係わり合いにならないのが無難な連中ね」

「だが……その依頼自体は真つ当な依頼だぞ。しかもちょうど良い条件じゃないか。なあ、カイル？」

メリナはカイルの方を見つめて言った。その目には一切の意見を受け付けないような迫力がある。問い掛けてるように見えるが、半ば強制しているようだ。当然、居候のカイルに断ることはできない。

「そうだね、メリナさん……」

「カイルもこう言ってることだし、受けることにしよう」

「なんで……そんなにこの依頼を受けたいのかしら？　もしかしてお金が欲しいの？」

「そつ、そんなわけじゃないか。欲しいぬいぐるみがアンティークで高かったとか、そんなことはないんだからな！」

メリナは呆れたような顔をした。カイルもまた微妙な顔をして彼女を見る。すると彼女は恥ずかしそうに顔を紅くして、下を向いてしまった。しかし彼女は、依頼書をがっしりと握りしめてミースに返さない。

「……まあ良いわ。受けたいなら受ければ良い。えーと、一番街の三の三だから……」

ミースはため息をついた。そのまま彼女は大きなシフィアの地図を取り出すと、依頼主のいる場所を探し始める。虫眼鏡を手にしてびっしりと細かい裏通りにいたるまで書き込まれた地図とにらめっこした。カイルやメリナもまた地図を覗き込み、依頼書の住所を探す。

そうして三人が地図を見ていると、大広間の扉が開かれた。バタリと音が響いて、背の高い、きつい印象を与える少女が中に入ってくる。彼女は肩までかかった長い金髪を揺らしながら、ざわめく魔導士たちを無視してカウンターへと近づいていった。

「三の三、三の三……」

「そこなら探さなくても良いわ」

「えっ……あの、あなた誰？」

少女に肩を叩かれたカイルはがくつとして勢い良く振り向いた。メリナとミースも地図から顔を上げて、少女の方を向く。少女は見慣れない顔をしていた。少なくともギルドの魔導士ではないようで、メリナとミースは揃って怪訝な顔をする。

「どちらさまかしら？ 依頼の受付なら場所が違っわ」

「そうだ、依頼の受付ならあっちのはずだぞ。何なら案内しよう」

「いや、結構。だって私の依頼はいま受理されたばかりみたいだもん」

「私の依頼？」

三人は慌てて額を付き合わせると、少女の正体についてひそひそと話し合いを始めた。彼らはカウンターに少し身を乗り出すと、ぼそぼそと小さな声だが盛んに意見を出し合う。すると少女はかばんから、さきほど彼らが見ていたのと同じ依頼書を取り出した。そしてそれを彼らの目の前にバシッと突き付ける。

「あのね、私がさっきからあんたたちが話してるこの依頼の依頼主なの。ほら、このオルシアってのが私の名前！」

第十三話 線路は続くよどこまでも

軋む鉄路、唸る鋼の巨体。蒸気機関車から煙突を取ったような列車がプラットホームに出入りする。そのたびに人がわらわらと客車や駅舎の方から現れて、にわかにホームが慌ただしくなる。

カイルたちは依頼をこなすべく駅に来ていた。オルシアが調査をするガルテニア遺跡はこの街から列車で丸一日、そこから馬車でさらに三日進んだ場所にある。護衛期間にはこの移動の日数も含まれていたため、早々に出発する必要があった。

「列車なんてあつたんだ……」

「料金が馬鹿高いからな、私も来たのは初めてだ」

カイルとメリナは田舎から来たお上りさんよろしく、駅の中を見回していた。木造の三角屋根をした白い駅舎に、煉瓦と石を積んでできているホーム。そのホームにある低めの屋根からは、木でできた手書きの時刻表が下がっている。それを見る限りでは、だいたい一時間に五本から六本は列車があるようだ。

アルカディアに列車はない。基本的に中世から近世にかけての西欧をモチーフにした世界観なのである。だがこの世界は五階建てぐらゐの煉瓦の建物があったり、列車があったりともう少し文明の進んだ世界であるようだ。カイルは改めてここがゲームではないとの認識を深くした。

そうしてあちこち見回しているカイルとメリナを、オルシアは困ったような顔をして見ていた。頼りなさそうな少年と、強そうだが

脳筋そのもののような女。彼女の目にカイルとメリナはするように映っていた。魔導士だが技術畑の人間であるオルシアには、そうとしか見えないのだ。もちろん、きちんとわかる人間が見れば、カイルたちの実力は明白なのであるが……。

「はぁ……。あんたたち、さっさと行くわよ！ もうすぐ列車が来るんだから。ほら、荷物持って」

「ああ、わかりましたよ！」

「カイル、列車だ。急ぐぞ！」

よっころしよとカイルが荷物を持とうとすると、列車がホームに滑り込んできた。カイルとメリナは慌てて荷物を背負う。まるで探検家のような荷物を背負った二人は、降りてきた乗客を避けながらなんとか客車へと駆け込んだ。二人は手動ドアを閉めると、やれやれと息をつく。

「乗り遅れるとこだった……」

「危なかったな、カイル……」

「もう、気をつけてよ。あんたたちがいなくなったら困るんだから。……座席に行くわよ、えーとチケットはこうだから……」

オルシアはチケットを取り出すと、それを座席の肩の部分に書かれた番号と見比べ始めた。彼女は左右に首を振りながら、ゆつくりと通路を歩いていく。そのあとにカイルたちも続いていった。

列車の中は、とてもゆつたりとした高級感のある内装だった。飴

色の木の外枠に、緑の柔らかなクッションが付けられた座席が左右に二つずつ備えられている。前後の感覚はかなり開けられていて、足を延ばせそうなほどだ。さらに壁には、魔法による落ち着いたランプが取り付けられていた。

「ずいぶんと高級だなあ。ちょっと場違いに思えてきたよ」

「私もだ。オルシアさん、列車というのはどこもこうなのか？」

メリナが気後れしたような顔をして、オルシアに聞いた。彼女は一旦カイルたちの方を振り向いて、足を止める。そして彼女は手を挙げてやれやれと肩を竦めた。

「まあね。運賃が半端じゃないから金持ちしか乗らないもの。ああ、今回は協会から経費で落とすから別に私は金持ちじゃないわよ。それと私のことはオルシアで良い。一緒に旅をするんだから、堅苦しいのは嫌なの」

「わかったオルシア」

「わかったよ、オルシア」

「それでいいわ。さつ、座りましょう」

オルシアはチケットを一瞥すると、奥の窓側の椅子へと身体を滑り込ませた。続いてカイルとメリナは座席の下に荷物を下ろすと、その向かい側に座る。座席のクッションは柔らかく、三人の身体をふんわりと包み込んだ。

「うわあ、柔らかい……！ やっぱ列車は良いわね。経費で落ちて

良かったあ」

「……良くこんなのが経費で落ちたな」

「普通はありえないね……」

カイルとメリナは疑わしげに眉を歪めた。二人には経費でこれだけの列車の運賃が下りるとは到底思えなかった。しかし、オルシアはそんな二人を見ると不敵に笑う。

「そう思うのも無理ないわ。私も最初はびっくりしたものだ。でもこれには理由があつて……」

オルシアは持っていた大きめのポーチから、小さな紙を取り出した。そしてその紙を広げてメリナやカイルの方へと向ける。その紙には日付となにかの数値らしきものが事細かに記されていた。

「これは？」

「ガルテニア遺跡付近のマナ濃度の推移よ。魔法で送られてきたのを私が記録したの。ほら見て、ここ数日間で急上昇してるわ」

オルシアは桁が急に一つ増えている場所を示した。すると露骨にメリナの顔が曇る。その急にしかめつづらになった彼女の顔を、カイルは覗き込んだ。

「マナ濃度？ 何の話？」

「大気中に集まるマナの量だ。これが高くなると強力なモンスターが現れたりする。ダンジョンの近くはたいてい高いものだが……」。

あの数値は異常だな」

メリナは紙に書かれた数字を睨んだ。すっと目が細まり、いつもとはひと味違う引き締まった表情になる。それを見たオルシアもまた、さきほどまでとは違う深刻な顔になった。彼女の額には深いしわが刻まれ、その細い眉は歪む。

「そうよ、これだけ異常な数値が出たから一番近くにいた契約魔導士の私に調査依頼が来たの。しかも、移動時間節約のために列車を使う許可までくれたわ。はっきり言って、いつどんな化物が現れてもおかしくないからね……」

第十三話 線路は続くよどこまでも（後書き）

感想、評価などよろしくお願いします。

第十四話 ガルテニア遺跡都市

蹄が赤茶けた地面剥き出しの小道を、小気味良いリズムで蹴っていく。白い幌付きの速さだけを求めたような簡素な馬車は、草原の道を疾走していた。がたがたと大きな音を響かせ、それは視界の端から端へとすっ飛んでいく。

その行く先には街があつた。大きさはたいしたことないが、くすんだ灰色をした高い城壁がぐるりとその周りを囲んでいる。さらに城壁の上に出ている建物の屋根も色味に欠けていて、どこことなく物々しい雰囲気のある街だ。

馬車の中にいたカイルは、迫り来る街に目を奪われていた。彼は馬車に付けられた窓のような穴から、熱心に身を乗り出している。そして十分に街を見た彼は、馬車の中に視線を移した。さらに彼は馬車の中で暇そうにしているオルシアに声をかける。

「あそこがガルテニアの街？」

「ええ、そうよ。あの街の地下に私たちが調査に行く遺跡もあるわ」

「遺跡の上に街があるのか？」

「遺跡の中からそれなりに価値がある物が出てね。一攫千金を狙うような輩とか、目ざとい商人が集まって街ができたのよ。けどそんな奴らばかりの街だから治安は良くないし、おかげで街自体の整備も進んでないわ。だから人口はそれなりに多いけど、鉄道建設どころか街道の舗装すらできてないの」

オルシアはそれだけ言うと、忌ま忌ましげに幌の隙間から舗装されてない道を見た。彼女は腰をさすりながら、くたびれたようなため息をつく。どうやら揺れる馬車の中ですから腰を痛めたらしい。

その一方で、メリナは元気だった。彼女は布を片手に鎧の整備をしているが、その動きには落ち着きがない。その目は何やら輝いていて、子供のものである。どうやら、ガルテニアの街へ行くのがよほど楽しみなようだった。

カイルがそうして対照的な二人を観察していると、いよいよ街は迫ってきた。街への入口となる厳めしい門が、どんどんその大きさを増していく。御者はその門が見上げるほどになった時、馬に鞭を打った。二頭の馬はいななきながらその脚を止める。

カイルたちは荷物を纏めると、馬車から降りる準備をした。すると門の脇の扉から門番らしき男が数名、馬車に向かって来る。彼らは幾分横柄な態度で馬車の前に立ち塞がると、手を差し出した。

「その馬車の者、通行証を出せ。この街に入るには通行証が必要だ」

「はいはい、ちょっと待ってくれ。これがわしの通行証だ。お客さんも早く通行証を出してくれよ」

「はい、いま行くわ。カイルたちも降りるわよ」

オルシアはポーチから手の平サイズのカードを取り出すと、素早く馬車を降りた。カイルたちもそのあとに続いて、馬車の後方から地面に飛び降りる。オルシアはやや遅れてきた二人を引き連れて、門番たちの前にビシッと立った。彼女は態度の大きい彼らにカード

を突き付ける。その顔はどうだと言わんばかりの顔、いわゆるどや顔をしていた。

「これでどう?」

「これは……失礼しました! どうぞお通り下さい。遺跡の方はこの先の道をまっすぐ行ったところにあります。脇に管理施設がありますので、調査の際はご連絡下さい」

「ん、丁寧にありがと。二人とも、そういうことだからさっさと行くわよ」

「ああ、行こう」

「そうだね」

オルシアは門番から通行証をスツと返してもらうと、門をくぐって行った。カイルたちもすぐにそのあとを追いかけていく。三人は軽快な足音を響かせながら、街へと入っていった。

街の中はずいぶんと荒れていた。表通りだというのに、石畳の石は剥がれて雑草が生え放題。通り沿いの建物の石壁はくすんで、白かったであろうそれらはみな灰色だ。壁にはところどころ落書きまななされていて、とてもまともな雰囲気ではない。

「すっごいところね……。初めて来たけどびっくりだわ」

「ああ、まったくだな。しかもこれだけではなく住人の質も悪いよ
うだ」

「確かに、見た限りならず者ばかりだよな……」

オルシアたちは少々、呆れたような顔をして周りを見回した。三人の周りを行く通行人、それはだいたい目を嫌にぎらぎらとさせていたのだ。筋骨隆々として巨大な武器を背負った男やら、痩せているが手に宝石をじゃらじゃら付けた商人やら。果ては露出過多な服で男を誘う女までいる。

カイルたち――特にオルシア――は眉をひそめると、ゆっくりと街を歩いていく。彼らは遠慮のない視線をぶつけてくる街の住人たちに顔を歪めながらも、通りをまっすぐ進んでいった。背の低い建物が雑多に並ぶ町並みを、カイルたちは次々と通り過ぎていく。

そうしていくと、三人の前に巨大な建造物が見えてきた。継ぎ目のまったくないドームのようなそれは、周囲の建物に倍する大きさがある。その漆黒の表面は鏡のように滑らかで、陽を反射しては煌めいていた。さらにそこから、二重螺旋を象った青と赤のモニュメントのような物体が付きだし、空を貫いている。さながらそれは、地上に突き立てられた裁きの十字のようだ。

どうしようもなくその建造物は異様だった。カイルはそれに本能レベルで拒否感を抱く。五感のすべてが逆立ち、近づいてはいけなと彼に警鐘を鳴らす。消える、溶ける、弾け飛ぶ。カイルにとつてそれはさながら、頭の中が派手に散らばってしまったかのような痛烈極まる感覚だった。

「おい、大丈夫かカイル！」

「何とか……」

「マナ酔いでもしたのかしら……。でももう大丈夫そうね」

カイルの顔は一瞬、瀕死の病人ほどに青ざめたがすぐに元に戻った。それと同時に、カイルの感じていた不気味で嫌悪感に満ちた感覚も消えていく。そのため彼は心配そうな顔をした二人に、軽やかな笑みで応えた。

しかし彼の心には、さきほど感じた強烈な感覚がしっかりと刻み込まれたのだった――

重要なお知らせ（前書き）

大変重要なお知らせです。

必ずご覧いただきますよう、お願いします。

重要なお知らせ

この度、この小説「アルカディア・サーガ」を改訂版として新しくリニューアルすることに致しました。

改訂するに至りました理由はいくつかあります。

- 1・更新速度を重視し過ぎてクオリティが下がってしまった。
- 2・設定と作品の雰囲気がいマイチ噛み合っていない。
- 3・ほぼ同名のオンラインゲームが実在した。

このような理由からまことに申し訳ないのですが、改訂版を新たに投稿したいと思います。なにぶん、話の設定とかから考えるとただの改訂では済まなさそうな状態でしたので……。

改訂版の題名は「青輝のラジエル」。コードはN5123T。URLは<http://nksyosetu.com/n5123/>です。

検索をかけて頂ければ一発で出ますので、そちらの方をご覧頂ければ幸いです。

作者の勝手に読者の皆様にご迷惑をかけてしまい、申し訳ありません。できるだけ早期に改訂版が追いつくようにしますので、今後もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315t/>

アルカディア・サーガ

2011年5月24日09時51分発行